

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会  
2013年8月24日  
文責：JUN

## 教え合いから学び合いへ

### 1 かかわりに積極さが出てきた子どもたち

訪問を始めて何ほどの回数にもならない学校で、初めて訪れたときには目にできなかった子どもの前向きなかわりが見られるようになることほどうれしいことはありません。わたしが推し進めている「学び合う学び」は、子どもがかかわり合って学ぶことによってその深まりを目指すものだからです。

A小学校は訪問を始めて2年目、B小学校は3年目です。本年度になって最初の訪問で目にした子どもの姿は、両校ともとても落ち着いたものでした。その落ち着きは、願いを一つにして取り組む教師たちの熱意と、その熱意のもと指導を繰り返してきた「聴くこと」の結果だと思われました。

特に感心したのは、グループで学ぶ時間が大幅に増えていて、そのグループでの学び方に積極性が出てきていることでした。グループ学習は、「学び合う学び」において大きな位置を占めます。少人数で、教師の介在なしで、互いの考えを出し合って学ぶ場は、教師がコーディネートする全体学習以上に、子どもの学び合いの意味が大きいからです。

教師から「グループで」という指示が出るやいなや、さっとグループの形になり、間髪いれずに聴き合いを始めます。4人の頭がくっつくように近づき、その表情は真剣だけれどやわらかさを感じられます。声量は抑えられていて、すべてのグループで対話が行われているのだけれど、不思議なほどざわざわ感はありません。しかも、語っているのは一部の子どもではなく、どの子どもにも語る場が存在しているようです。それは、グループの輪から外れている子どもがいないということを示していました。

こういう状態になればもうしめたものです。適切な課題さえ提示すれば、そこから子どもたちが良質の学びを生み出してくれるでしょう。外部協力者として訪問していて、こういう手ごたえが感じられることほどうれしいことはありません。

### 2 学び合いは教え合いだと思い込む考え違い

かかわりへの積極さを好ましく思いながら、そこでわたしが着目したのが、グループ内での子どものかかわりの内容でした。「学び合う学び」は、子どもがかかわり合うことを目指しますが、それは、かかわりが生まれればそれだけでよいということではありません。大切な

のは、そのかわりが学び合いになっているかどうかなのです。そこを見極めないと、グループ学習が雑談の場になりかねません。ですから、ここまでの姿が生まれると、わたしの関心はかわりの内容に向くことになるのです。

グループでの子どもたちの様子を見ていて、やはりこうなってしまうのだ、でもここからどう脱却するかが「学び合う学び」深まりの鍵になる、そういう意味では、これはだれもが通る関所のようなものなのだと感じたことがあります。それは、子どもたちのかわりが、学び合いではなく「教え合い」になっていたことです。

「教え合い」と「学び合い」の違いについては、拙著『「学び合う学び」が生まれるとき』（世織書房）に詳述していますが、要するに、よく分かっている子どもがそうでない子どもに教えるのが「教え合い」、逆に、分からない子どもが援助を求めてそれに他の子どもが応じるのが「学び合い」です。「教え合い」は教えることが軸になりますが、「学び合い」は分からないことを学ぼうとする行為が軸になります。「学び合う学び」では、「教え合い」ではなく「学び合い」が好ましいのです。

A小学校で目にした高学年の学級でも、B小学校で目にした中学年の学級でも、グループ内での子どもたちのかわりは実に積極的でした。一人としてぼんやりしている子ども、学ぶことを放棄している子ども、だれともかわらずぼつんとしている子どもはいませんでした。けれども、すでに問題が解けた子どもが、分からないで困っている子どもに教える状態に陥っていました。それはそれで、自分は分かったのだから友だちである〇〇さんも△△くんも分かるようにしなければという意欲の表れで、その意欲を否定してはなりません。しかし、これは「教え合い」です。これでは、学びにおいて大切な「互恵的關係」は生まれません。かわり合ってよかったと思う時には、互いにそうしてよかったと思える事実が生まれます。それがなく分かっている子どもから分からない子どもに一方に「教える」という行為では双方に学びが生まれないのです。ですからそれでよしとするわけにはいかないのです。つまり、A小学校とB小学校が直面している課題は、「教え合いから学び合いへ」というグループの学びの内実の転換なのです。

### 3 「学び合い」を生み出す鍵は「わかさなさ」を見つめる目

学校においては、分かることは値打ちのあること、分からないことは恥ずべきことという見方が強烈に存在します。ですから、なかなか理解できない子どもは、いつも劣等感めいたものを抱えています。そして、その恥ずべき状態を隠そうとします。中学生になればそれは顕著になります。そうして、その「わからなさ」をますます増幅させているというのが実態なのではないでしょうか。

しかし、「わからない」ということは恥ずべきことでしょうか。「早く分かる」ということはそれほど値打ちのあることなのでしょう。何の苦勞もしないですっと分かった場合と、苦勞してやっと理解できた場合と比べて、結果としては同じことが分かったのですから両者に違いはありません。そう考えると、早く分かったほうがよいと考えることになります。け

れども、どちらの子どもに「学び」が生まれているかと考えると、その見方は一変します。苦勞して分かった子どもは一つの問題を解くためにさまざまに思考しています。その過程に、「なぜだろう、ひょっとしたらこうするのでは、そうだ、そうなんだ」といった探りや気づきをしています。その一つひとつが実に貴重なのです。それがその子どもの「学び」になります。そう考えると、ずっと分かった子どもより「学ぶ」ということに関しては深いのではないのでしょうか。

「学び」は、分からないことに挑むから楽しいのです。意味があるのです。分からなさを克服したいという意欲に燃えて挑戦したとき、脳が活発に思考し考える力が伸びるからです。どんな人でも、長い人生において分からなくなることで、大変な困難に突き当たることがあります。実はそういうときこそ、自分の中に潜んでいた何かが姿を現し、思いがけない発想が生まれたり、その困難に挑む力が湧いてきたりします。つまり「分からないこと・困難なこと」は「学び」を生み出すのです。そう考えると、「分からない」ということは恥ずべきことではなく歓迎すべきことなのです。

教師は、子どもたちに「分からないということはそこに宝物があるということだ」と、常に語りかけることが大切です。そして、子どもの「分からなさ」を決して放置せず、その「分からなさ」から見事な学びを生み出す授業を実行することです。その事実が、「そこに確かに宝物がある」という確信を子どもにもたらします。

この「分からなさを見つめる目」が共有されれば、今まで劣等感を抱いて縮こまっていた子ども、投げやりになっていた子どもの目が輝いてくるようになります。それは、すべての子どもの学びを保障することを目指す「学び合う学び」にとって欠くべからざることです。

しかし、それだけではまだ「互恵的な関係」は生まれていません。分からなかった子どもが分かるようになっていく過程で、分かっていると思っていた子どもにも学びが生まれるようにならないと、そこに「互恵的な関係」は存在せず、ひいては、すべての子どもの学びの保障にはならないということになります。だから、「教え合いから学び合いへ」という方向が大切なのです。

#### 4 分からない子どもに寄り添ったとき

10個で50円のあめがあります。そのあめは、1個いくらでしょうか。
-----------------------------------

ある学級の算数の時間、子どもたちがこの問題に取り組んでいました。1人の男の子が模型の十円玉を5個机の上に並べじっと考え込んでいました。5個の十円玉が10個に分けられなくて困っていたのです。やがて、教師からお隣の子とペアになって学び合うようにという指示が出ました。

横の女の子がこの子どものほうに体を向け、机の上に並べたお金の模型を不思議そうな顔でのぞき込みました。すると、彼はその女の子にこう話しかけたのです。

「10に分けられないよ」

すると、その女の子は、

「ほんとだね」

と言ったのです。その途端、これまで考え込んでいた男の子の顔がぱっと明るくなりました。自分の困り感に共感してくれたことがよほどうれしかったのでしょう。

男の子は言いました。

「どうしよう？」

それから、2人の会話が始まります。

「5個は10には分けられないよね」

「うん。10のほうが数が大きいから」

「.....」

「10より数が大きかったら分けられるよね」

「うん」

「そしたら、十円玉5個の5じゃなくて、50のままだったら10より数が大きいから分けられるよね」

「ああ、そうかあ。.....そうだ！ 1円玉50個にすればいいんだ」

「うん、そうだね。.....1円玉、持ってこよ」

こうして二人は、教室の一隅に備え付けてある教具から1円玉50個を数えて持ってきたのです。そして、2人でそれを10に分けていきました。やがて、2人の机の上に、1円玉5個ずつの10の固まりができました。男の子も女の子も満足そうな顔になり、男の子はノートに答えを書きました。「 $50 \div 10 = 5$ 」と。

なんでもないようなシーンです。けれども、ここに学び合いの鉄則のようなものが存在しています。実は、女の子のノートにはペアをする前から「 $50 \div 10 = 5$ 」と書かれていたのです。この子はすでに答えを出していたのです。しかし、彼女は、男の子とのやりとりでそれをおくびにも出しませんでした。その答えを教えようとしませんでした。この子がしたことは、男の子が困っていることに寄り添って一緒に考えたということなのです。

男の子は模型のお金という具体物を通さないと納得できない子どもでした。日常生活で50円といえば、50円玉か、10円玉5個を使っていたのでしょう。教室の教具入れには50円玉は置いてありませんでした。ですから10円玉を持つてくることになったのです。

それはそれとして、女の子は「5は10には分けられない」という男の子の事実に寄り添います。そういう対応ができる関係を育ててきた教師の存在が裏に垣間見えて感動していると、そこからがますますすごいことになっていったのです。つまり、数の小さいものはそれより大きい数には分けられない、つまり割れないというポイントを2人で共有し、それなら10より数の大きいものにすればよいということになるのです。そのとき、お金にこだわってきた男の子が、10円玉ではなく1円玉にすれば数が大きくなって分けられるという気づきをしたのです。もちろん1円玉ではなく5円玉でも10に分けられるのですが、教具入れには5円玉は置いてありませんでした。男の子は最初に教具入れに10円玉を取りに行ったとき、5円玉がなくなるとくさん1円玉があったことに気づいていたのでしょう。5円玉がなかったのは単なる偶然か、それとも教師が意図的にそうしたのかは分かりませんが、十進数として考える

には5という固まりは存在しないほうがよかったです。

こうしてこの男の子は「 $50 \div 10 = 5$ 」を解くことができました。しかし、わたしは、その相手をした女の子にも学びが生まれているのではと思いました。それは、「 $50 \div 10$ 」の場合、まずは割られる数の上の位だけ、つまり「5」が「10」で割れるかどうか考え、割れなければ位を一つ下げて、この場合だと「50」にして割るという「割り算」の考え方を実行することになったからです。

おそらく、これから子どもたちが学ぶことになる割り算の桁数はどんどん増えていくでしょう。けれども、どれだけ桁数が増えてもこの原則は変わらないのです。そういうふうにと考えると、女の子は学び直しをしたとも言えるし、ひょっとすると割り算の大切な学びをしたとも言えます。わたしが、学び合いは「互恵的」でなければならない、いえ、本当に学び合えば「互恵的」になるというのは、こういうことなのです。

## 5 互恵的な学びは寄り添い合いから

はっきりしていることは、先に分かった子どもがまだ分からない子どもに一方的に教えるという行為では、こういう互恵的な関係は生まれにくいということです。それがどれだけ善意に満ちた、誠実なものであったとしても、そこで生まれるのは友だちにやさしくしたという満足感のようなものでしかありません。何か気づく、学ぶということにはおそらくなっていけないでしょう。もちろん、教えるという対応が全面的によくないと言っているわけではありません。一か百かという考え方をしているわけではなく、できれば互恵的に学び合えるようにしたいと言っているのです。人と人のかかわりに互恵的なものがなくてはならないと思うからです。さまざまな違いや能力を超えて、どの人も他者とかかわることで豊かになれる、そういう関係は互恵的でなければ実現しないからです。わたしたちは、たんに、よい授業をするためだけに学び合いを取り入れているわけではありません。子ども一人ひとりが、これからさき生きて行くことになる世界において、他者と豊かにかかわりながら、学び、育ってほしいと願うからです。そこに「互恵性」がなくてはならないからです。だから、教えることを全面的に否定するものではないけれど、学び合える子どもにしなければならないのです。

さて、ここでもう一度、前掲の算数の授業における子どものやり取りを見直してみましよう。そして、こういうかかわりが生まれる背景について考えてみましょう。そこには、いくつかの原則があるようです。そのいくつかを述べてみますが、これを「やり方」と受け取らないでください。「やり方」だとして方法だけやっても、そこで生まれる学びの姿は似ても似つかぬものになるでしょうから。

### ① 尋ねることから始まる

ペアやグループの対話の始まりは、常に「尋ねる」ことにするよう子どもに言い続けることです。まだ分からない子どもが「わたし、わからない!」「ねえ、ここ、どうやるの?」と尋ねる、もうできている子どもがまだ分からない子どもに「どこで困って

いるの?」「どう考えてどこで分からなくなったの?」と尋ねる、そのどちらでもよいのですが、どちらにしても「尋ねる」ということから対話を始めるのです。

## ② 分からなさを尊重する

当然のことですが、「分からないということは恥ずべきことではない」という考え方を子どもたちに伝えなければ何事も始まりません。それには、教師が本気でそう思い、本気で子どもの「分からなさ」を大事にしなければなりません。

## ③ 相手に合わせる心を持つ

他者とかかわる時になくてはならない心の持ち方に「相手に合わせる」ということがあります。もちろんいつもかもそうしなさいというわけではありません。他者とのかわりにおいて、そういう状況もつくれる心の持ち方をしていることが大切だということです。ロブ・ルイスの絵本に『と・も・だ・ち』というのがあります。周りのどの子ども好きになれないと思っていた主人公が、それぞれの子どものしていることをともにすることで遊べるようになり、みんなが遊びに来てくれるようになるという物語です。そこには、つながりには相手に合わせることを欠かせないというメッセージが込められています。それは、「学び合う学び」において大切にしている「聴く」ということと相通することです。他者の言葉に耳を澄まし、他者の行動を尊重して見つめ心を砕く、そしてその世界を共有する、そうして人は他者とつながれるのでしょ

## ④ ともに考える

絵本『と・も・だ・ち』で主人公がそれぞれの子どものすることに合わせて一緒に遊ぶという場面があります。それは、グループの学びで言えば「ともに考える」という行為です。一方向に教えるのではなく、分からないでいる子どもに寄り添って、その道筋で「ともに考える」のです。そうしない限り、分かっていると思っていた子どもにも学びが生まれる「互恵性」は生まれっこありません。他者とともに歩むことで、それまでの自分にはなかった世界が見えてくるのです。また、無意識にしていたことの意味を知ることになるのです。

このように考えると、分かることは優秀なこと、分からないことは恥ずべきことという考え方に浸ってきた子どもが、何もしないで「教え合い」が「学び合い」に転換できるわけがないことに気づきます。大切なのは、上記の四つの原則をどのようにして子どもたちに伝え、子どもたちが本気でそう思うようにしていけるかということです。

それには、こういうふうになれば、というやり方をわたしは示すことはしません。何度も言うようですが、それは単なるやり方の問題ではないからです。この原則を本気でそうだと思われたら、そうでなければいけないと思われたら、その実現に向けて本気で子どもにぶつかってってください。その熱い思いの中からその人ならではのやり方が生まれます。それは、だれかのやり方の模倣では決して生まれえないインパクトで子どもたちを動かします。

ただ、子どもたちにどう実行させるかの前に、教師こそが、分からなさが宝物だと思い、分からなさに耳を澄まし、子どもの分からなさに寄り添って考えるようにしなければいけません。そうしようとする教師の覚悟が「学び合い」への道を開くのです。